

◆ 講演

中米のなかのコスタ・リカ

伊 高 浩 昭

以下は2018年1月13日、映画上映会『コスタリカの奇跡』に続いて行なわれた、伊高浩昭氏による講演「中米の中のコスタ・リカ」を同講師がまとめたものである。

上映映画

『コスタリカの奇跡 ～積極的平和国家のつくり方～』 原題：A BOLD PEACE

時間：57分 制作年：2016年 製作国：アメリカ・コスタリカ

制作：ソウル・フォース・メディア、スパイラル・ピクチャーズ（制作協力）

監督：マシュー・エディー、マイケル・ドレリング

講演

今晚は。私たちは先刻、観終わった1時間の映画で、コスタ・リカ（CR）という国の国民の一つの意志を理解しましたね。東西冷戦期の1948年に、軍備をなくして平和を創ろうと決意した指導者がいて、それを有権者の多数派が支持し、今日に至るという過程をも知ることができましたね。よくまとめられたドキュメンタリー映画だと思いました。

本学ラテンアメリカ（ラ米）研究所の林みどり所長が先ほど言われたように、ジャーナリズム、アカデミズム、映画などは、ある意図を持って、状況のある部分を切り取ります。その結果、記事、講義、作品などが生まれます。つまり、全体状況のある部分は取り上げられ、ある部分は切り捨てられるという冷酷な事実を踏まえ、映画を基に、補完的な話をします。

今、CRについて考える意味があるとすれば、平和憲法手直し問題に直面している私たち日本人有権者に参考になるからでしょう。安倍自民党政権による改憲の動きが急速に進んでいます。国軍を廃止し平和憲法を制定したCRを考えることは重要かつ意義深いことと思います。

▼アポロ・オンセ

私がコスタ・リカ（CR）に初めて行ったのは1969年です。当時の私の拠点はメキシコ市でしたが、その年は本拠地を離れ、中米諸国（グアテマラ、エル・サルバドル、オンドゥラス、ニカラグア、CR、パナマ）を取材することにし、中米中央部にあるニカラグアの首都マナグアを

拠点に定めました。

ソモサ家独裁3代目のアナスタシオ（タチート）・ソモサ政権期でした。マナグアを拠点に周辺の国々を移動取材していたわけです。マナグア湖畔に建つ、平屋で中庭のあるスペイン植民地風のホテルを長期滞在する宿舎にしました。1972年12月のマナグア地震で街は破壊され、このホテルも廃墟となりました。メキシコ空軍の救援機に便乗してマナグアに入った私は、無残な姿と化した3年前の思い出の拠点にしばし佇みました。

話を戻しますと、CRに入国したのは1969年7月20日だったと記憶しています。エル・サルバドルとオンドゥーラス（ホンジュラス）の100日戦争（通称「サッカー戦争」）を7月半ばサンサルバドルを拠点に取材して間もないころでした。首都サンホセには高層ビルはなかったか、ほとんど建っていなかったと記憶します。サンサルバドルでは一番背の高いビルは教会の大聖堂でしたが、同じような感じでした、

サンホセのホテルに投宿して間もなく中心街を歩いていた時のことですが、あちこちに人が固まっていました。皆、上の方を見ているので、何だろうと思ってそこに行ったのです。当時はまだテレビが一般家庭に行き渡っていませんでした。3メートルぐらいの高さに大きなテレビが設置してあって、それを皆で観ていたのです。市の公共テレビでした。

群衆は、米国のアポロ11号が月面着陸した中継映像に観入っていたのです。宇宙飛行士のニール・アームストロングがふわっ、ふわっと浮くように歩いている、あの映像でした。それは7月20日の正午過ぎのことでした。

私は最初にCRに行ったときに「アポロ・オンセ」（アポロ11号）をテレビ中継で観たため、とても印象深く、最初のサンホセやCRの情景を覚えているのです。余談ですが、ラ米諸国で生まれたばかりの男児に「アポロ・オンセ」という名前が付けられたというニュースが流れ、話題になったものです。

▼中米への属性

先ほど観た映画の背景をまず話します。コスタ・リカ（CR）は1821年にメキシコと一緒にスペインから独立しましたね。その後、5ヶ国は中米連邦、一つの州連合といえますか連邦体制をつくります。先ほど列挙した中米6ヶ国のうち、パナマを除く5ヶ国が連邦制をとったわけです。

パナマは、地理的には北米大陸南端の中米地峡に位置しますが、当時はコロンビアの一部であったため、中米連邦に加わる立場になかったのです。現在の中米は、狭義の中米5ヶ国および、パナマとベリーズ（旧・英領オンドゥーラス、1981年独立）の計7ヶ国です。ラ米6ヶ国と英連邦のベリーズを合わせて「中米7ヶ国」と呼びます。今日の演題を「中米の中のコスタ・リカ」としたのは、「中米の一国」という属性を離れてCR一国だけを語っても意味がないからです。

CRを考える場合、中米、カリブ沿岸国、ラ米、米州の一国という捉え方をすべきでしょう。一国だけをあたかも他国と隔絶した島国のように捉えるのは大間違いです。特にラ米諸国は相互に影響し合い、状況が連動します。誰にも好き嫌いがあり、特定の国を愛することは悪いことではないでしょうが、地元の中米を離れてCRを語っても発展はないでしょう。

このことは、メキシコの絵画好きが一つ覚えのようにフリーダ・カロを口にするのと似ています。メキシコ絵画を語るには、メキシコ革命および、ロシア革命後の国際政治状況から生まれた

「社会派壁画運動」を踏まえないと意味がありません。フリーダは壁画運動3巨匠の一人ディエゴ・リベラの妻であり、リベラや当時の社会・芸術状況あつてのフリーダでしたから。

▼米国策会社UFC

コスタ・リカ（CR）では、1821年の独立から半世紀を経た1870～80年代、コーヒー栽培・輸出が経済の中心でした。コーヒー経済が安定し、コーヒー財閥、コーヒー資本が国を支配していました。コーヒー経済隆盛で政治も波風が立たず、その政経両面の「安定」の下で、社会福祉や政治民主化など穏健な改革が始まります。

19世紀末の1899年に米国に、国策会社ユナイテッド・フルーツ・カンパニー（UFC）が登場します。同社はバナナと砂糖の生産をメキシコ、中米・カリブ諸国、コロンビア、エクアドールなどに拡げて行きました。UFCは弱小諸国の政治経済を支配し、支配された国々には腐敗した軍政や専横政治が蔓延ります。

世紀の変わり目に中米を訪れた米国人作家O・ヘンリーは、UFCに国運を握られた低開発諸国を「バナナ共和国」と呼びました。CRはカリブ沿岸地方を中心にバナナ畑が広がっています。この国も例外でなく、UFCの影響下に置かれていました。20世紀初頭、伝統的なコーヒー民族資本と米資本のUFCが経済の二つの流れとなります。

映画の主人公ホセ・フィゲレス（1906～90）は、臨時政府首班（1948～49）、大統領2期（1953～58、70～74）を務めた現代CR史上最大の政治家です。若い日には民族資本側にいて、米資本による経済支配を好ましくは思っていないでした。

フィゲレスは反共産主義者でもありました。もちろん政治家としては現実主義者ですから、映画にもありましたようにラファエル・カルデロン改革路線を引き継いだり、共産党とある種の妥協をしたりしました。しかし権力を握るや、共産党を切ってしまう。反共主義が表に出たのですね。

フィゲレスは米国のマサチューセッツ工科大学（MIT）に進学するのを止め、同大学やハーヴァード大学のあるケンブリッジ市に隣接するボストンに滞在して図書館に入り浸り、読書三昧の独学で知性を磨きました。読書を通じてトルストイのヒューマニズム、原始的社会主義などを学びながら、人生観や政治思想を自らに育みしました。大学教育を正式に受けなかったからこそ、フィゲレスの野人的自由奔放さ、思想的幅広さが生まれたのでしょう。

1940年の大統領選挙ではカルデロンが当選し大統領になり、改革を進めました。改革はとても重要でしたが、専横化し、その結果、フィゲレスが開始した内戦で追い出されてしまいます。改革路線はまずまず良かったのに、野心的になりすぎて独裁化したのが失敗だったのですね。

▼人民戦線

4年遡る1936年から39年まで「スペイン内戦」がありました。王党派のフランシスコ・フランコ将軍が率いる反乱軍が独伊両国の軍事支援を受けてスペイン共和国を破壊し、フランコは1975年に死ぬまで総統（カウディージョ）として独裁支配を続けます。ソ連のスターリンはスペイン内戦中、全世界の共産党や共産主義者に号令を発し、ヒトラー・ナチズムのドイツ、ムッソリーニ・ファシズムのイタリアに支援されたフランコ軍と戦うよう求めました。スターリンはナチのドイツが将来の大敵となることを予知していました。

スターリンの号令を受け各国共産党は、社会党など共産党以外の進歩主義勢力と組んでナチズム、ファシズムと戦う戦線を構築します。これが「人民戦線」です。世界中から共産黨員、労働者、知識人、芸術家らが内戦中のスペインに赴き、共和国軍を支援しました。

アンドレ・マルロー、ジョン・ドスパソス、アーネスト・ヘミングウェイ、パブロ・ネルーダ、ダビー・アルファロ＝シケイロス、ジョージ・オーウェルら多くの知識人や芸術家がファシズムを食い止めようと、共和国側に立ちました。前線で戦闘し重傷を負ったオーウェルの著書『カタロニア讃歌』を読めば、内戦の重要な断面が理解できます。ニューヨークでコックをしていた日本人ジャック白井も人民戦線で戦い、戦死しました。しかし共和国側は、フランコ叛乱軍の「国民戦線」に敗れます。

キューバでは、フルヘンシオ・バティスタ大統領の政権に、人民社会党（PSP）と当時呼ばれていたキューバ共産党の幹部が入閣しました。人民戦線の一形態ですね。CRではカルデロン大統領が、当時の共産党（人民前衛党）の改革政策を頂戴して実施したわけです。これも人民戦線の端くれです。カルデロン政権は1940年から4年間続きました。

▼カリブ軍団

ここでフィゲレスがまた登場します。フィゲレスは庶民的ではありますが、反共主義者です。改革政策で多くの人が幸せになればいいという立場ですが、カルデロンの人民戦線的手法や専横性が気に食わないと異議を唱え、弾圧されます。そこでメキシコに行きます。一種の亡命ですね。フィゲレスはカルデロンを正面の敵と定めます。

メキシコは、1910～17年の革命の後も動乱期が続き、革命派と保守派がいがみ合っていました。スペイン内戦が続いていた当時、メキシコ革命の中興の祖ラサロ・カルデナスが大統領でした。スペインの人民戦線側に資金や武器を送ったのがカルデナスです。政権を離れた1940年、第2次世界大戦下で発足した新しい政権で国防相を務めました。

そんな時期に、フィゲレスは2年間メキシコに滞在しました。メキシコにはスペイン共和派やラ米諸国などからの亡命者が数多く住んでいました。フィゲレスはメキシコとグアテマラで政治家やカリブ沿岸諸国などからの亡命者と昵懇になり、「カリブ軍団」を結成することになります。カリブ・中米地域の独裁政権を倒すのが目的でした。

▼フィゲレスの蜂起

グアテマラから帰国したフィゲレスは、サンホセ郊外に集団農場を築きます。トルストイ的な理想主義に沿っていました。この点では武者小路実篤らが宮崎県内につくった「新しい村」や、日本人ブラジル移住者がサンパウロ州アリアンサに創った「弓場農場」も同じトルストイの理想主義の流れを汲んでいます。

フィゲレスは、その農場を軍事訓練基地にします。カリブ軍団の有力な支援者の一人に、当時のグアテマラ大統領ファン＝ホセ・アレーバロがいました。進歩主義者で、アルゼンチンのファン＝ドミンゴ・ペロン大統領とも親しい間柄でした。

アレーバロ大統領は、軍資金、武器、兵員をコスタ・リカ（CR）のフィゲレスの元に送ります。フィゲレスは送り込まれたグアテマラ人やジャマイカ人の要員とCR人で叛乱部隊を組織し、農場で軍事訓練したのです。

1944年の大統領選挙では、カルデロンの息のかかった人物が当選します。その4年後の1948年の大統領選挙にカルデロンが出馬しますが、敗北します。ところが同時実施の国会議員選挙では、共産党を含むカルデロン派が勝ちました。政権と国会に捩れ現象が生じました。カルデロンは国会決議をもって政敵の当選を無効にし、自分がお手盛りで政権を支配しようとしていました。そこでフィゲレスが決起することになります。

カリブ軍団と組んだ叛乱部隊は、今から70年前の1948年3月に蜂起し、早くも翌4月下旬にサンホセ攻略目前となります。そこにローマ法王庁、米国、メキシコが和平を仲介し、停戦します。敗れたカルデロンは、ソモサ独裁政権下のニカラグアに亡命します。

臨時政権首班となったフィゲレスは同年12月1日、国軍廃止を宣言し、翌1949年11月制定の新憲法で正式に軍隊は廃止されました。国軍が使っていた武器類は集められ倉庫に保管され、厳重に管理されました。

逸話を紹介しますと、フィゲレスは10年後の1958年、革命戦争中のフィデル・カストロ率いる反乱軍に輸送機1機分の武器を贈りました。倉庫にあった旧国軍の武器でした。

では、なぜ国軍を廃止できたのでしょうか。

▼米州諸国機構

当時、米州には米国主導で前年1947年9月に締結された「米州相互援助条約」(TIAR)という多国間軍事条約がありました。第2次大戦直後に始まった東西冷戦が深刻化しつつあり、米国は「ラ米の共産化を防ぐ」という名目で反共軍事同盟を結成したわけです。

個人の経済的成功を至上価値と見なす移民国家の米国は、社会主義を忌み嫌う強烈な反共主義の国ですが、1940年代末から「マッカーシズム」と呼ばれる魔女狩り旋風が吹き荒れていました。1950年代初めには朝鮮戦争が勃発し、朝鮮半島は熱戦の巷と化しました。私が小学校低学年生だったころのことです。この戦争は、今日まで続く南北朝鮮の冷戦状況として残存しています。

一方、これも歴史の妙味と言いますか不思議と言いますか、あるいは皮肉でしょうか、コスタ・リカ(CR)が内戦を戦っていた1948年4月、コロンビアの首都ボゴタで米州外相会議が開かれ、今日に続く米州諸国機構(OEA/OAS)が結成されます。冷戦下で米国が米州を反共地域として支配するためつくった地域の国連のような機構です。その軍事部門がTIARです。

脱線しますが、OEA結成に先立つ4月8日、次のコロンビア大統領選挙の最有力候補と見なされていた自由党のホルヘ＝エリエセル・ガイタンという有名な政治家が暗殺されました。殺し屋が、そばにいた「群衆」からすぐさま私刑で殺されたため、ガイタン暗殺の真相は今も定かではありません。

暗殺に怒った自由党員を含む群衆はボゴタ市内、周辺地域で暴動を起し、殺傷、放火、略奪を恣にしました。この騒乱の巷に、ハバナ大学法学部生だった若き日のフィデル・カストロが居合わせました。ペロン・アルゼンチン大統領の肝煎りで、米州外相会議開催に合わせボゴタで開かれるラ米大学生連盟結成準備会合に出席するため滞在していて巻き込まれたのです。この経験をフィデルは後に、キューバでの革命運動に活かしました。

このボゴタで起きた大事件を「ボゴタソ」と呼びます。スペイン語の名詞の語尾に「ソ」を付けると、荒れた出来事とか、強い力が加わること、などを意味するようになります。たとえば、

1989年2月にベネズエラの首都カラカスで起きた大暴動事件も「カラカソ」と呼ばれます。強力な大統領が指（デド）を差して後継候補を指名することを「デダソ」といいます。

2016年のノーベル平和賞は、コロンビアのフアン＝マヌエル・サントス大統領が受賞しましたが、それは1960年代初めから続いていたゲリラ組織「コロンビア革命軍」(FARC)と政府の間で和平を達成した功績が認められたためです。この内戦の遠因に、ボゴタソ後の革新・保守両勢力間の対立状況や、1959年元日のキューバ革命があります。

ところでOEA (OAS) ですが、日本では外務省の訳語に従ってマスメディアは「米州機構」と書いています。定着しているこの訳語は正確ではありません。「諸国」が抜けているからです。LAC (ラ米・カリブ) 諸国 (現在33ヶ国) には、各国の主権と多様性を重んじ、米国の言いなりにはならないという決意があり、その意志表示が「諸国」に秘められているのです。アンデス諸国共同体 (CAN)、南米諸国連合 (UNASUR)、ラ米・カリブ諸国共同体 (CELAC) など、多くの域内多国間機関に「諸国」が入っています。加盟諸国間の平等性を表しているのです。ですからOEAは米州諸国機構です。

▼フィゲレスの計算

話をコスタ・リカ (CR) 内戦に戻します。フィゲレスは勝利すると、臨時政権として執政評議会を樹立し、自ら議長 (暫定大統領級) に収まります。1948年12月に軍隊を廃止したのですが、なぜ廃止したのか、廃止できたのが重要です。先刻触れたカルデロン政権期以降、改革により社会福祉がかなり広まり、中産階級が厚みを増しつつありました。国民は政治・経済の安定、生活向上、社会の安寧を求めています。

フィゲレスは、CRというラ米では民主的伝統のある国で軍事蜂起し、グアテマラ政府やカリブ軍団の支援を得て、自国の非合法政権を倒しました。正確な数字はありませんが、CR内戦で2000人以上が死んだとされています。小さな国にとっては大きな数字ですね。そんな流血の大事件を起こした張本人フィゲレスの「革命」は、いくら非合法政権を倒すためだったとしても、CR国民を簡単には納得させられなかったのです。また、正統性を中米をはじめとする米州諸国に認めてもらわねばなりませんでした。

そこでフィゲレスには思い切った措置が必要になりました。その格好な政策が軍隊廃止でした。軍隊がなければ軍事クーデターは起きないでしょうし、廃止で浮く国防費を教育や社会福祉に回すことができます。

それにCR国軍は、フィゲレスの反乱部隊に短期間で敗れるぐらいですから弱かったのです。内戦のずっと前に隣国パナマとの紛争がありましたが、そのときもCRは負けました。しかし叛乱部隊に敗北したのが決定的でした。国軍に辛くも残っていた権勢は地に落ちました。だから潰しやすかったはずです。

さらに現実主義者のフィゲレスは、米州相互援助条約 (TIAR) の存在を計算していました。それは内戦中にできた米州諸国機構 (OEA) の軍事部門ですが、反共主義者フィゲレスに、米国肝煎りの反共の砦となるOEAやTIARへの異存はなく、フィゲレスは軍隊廃止を宣言した直後にTIARを批准しました。

TIARは当時の加盟国中13～14ヶ国が批准すれば発効することになっていましたが、CRの批准

によって条件が満たされ、発効しました。無論、絶好のタイミングでCRは批准したわけです。TIARは、ある加盟国が他国から侵略されたら加盟諸国はこぞって侵略された友邦を支援すると定めています。先ほどの映画では「CRは国際機関に安全保障を頼った」と説明されてましたが、TIAR加盟があったわけです。

隣のパナマの運河地帯には当時、米南方軍がたくさんの基地と兵力を維持しており、一朝事ある秋^{とき}には、CRは米軍がすぐにやって来られる地理的位置にありました。カルデロンは亡命したニカラグアのソモサ政権の支援を得て2度に亘ってCR西部に攻め込みましたが、いずれの場合も軍隊に代わる国家警備隊が反撃し侵入部隊を敗走させることができました。軍備廃止はOEAとTIARという機構があったからこそ可能だったでしょう。

▼ニカラグア内戦

米国は東西冷戦戦略として、ソモサ独裁をはじめ幾つもの独裁政権を支援していました。だからコスタ・リカ（CR）のフィゲレスの反共主義は良しとしながらも、カリブ軍団の関与や国軍廃止などは面白くないわけです。軍隊がなくなれば、米国製兵器を売り渡すこともできなくなります。軍隊をなくし「平和」とか「平和憲法」とCR人が叫ぶのも、世界的規模で臨戦態勢にある覇権主義の米国には面白いわけがありません。

しかし当時、LAC（ラ米・カリブ）地域には独裁政権が多くあったため、CRという民主の伝統があり、短期の内戦を経て民主を回復した国は、内外に「民主体制の存在」を印象づけるショーウィンドーとして価値がありました。米政府は、冷戦状況の下で専横政権を仕方なく支援していましたが、本来はCRのような民主体制を望んでいるのだということを国際社会や共産圏に示しなかったのです。ある種の二律背反、二重基準ですね。

ともあれ、米国滞在経験のあるフィゲレスは、米政府の思考や意図を読んでいたのでしょう。CRの決意は、「軍がないことこそが安全保障なのだ」という論理を成り立たせました。

しかし1980年代に中米内戦が真っ盛りになると、その理屈もぐらつきました。1979年7月19日、ニカラグアで「サンディニスタ革命」が成功します。ゲリラ部隊に加え、民衆も蜂起し、ソモサ独裁政権を倒しました。革命政権は社会主義を志向しました。当時は、リベラル姿勢が際立つジミー・カーター米大統領期で、革命が成功しやすかったと言えるでしょう。米軍が介入すれば、革命は潰されるでしょうから。

その後のロナルド・レーガン大統領は、ハリウッドで映画俳優をしていたころから反共主義者で、1981年に就任するや、サンディニスタ政権を倒すため、隣国オンドゥーラスに元ソモサ派らで編成した反革命軍（コントラ）を配置し、ニカラグアに攻め込ませました。長い内戦が続くことになります。

しかし、サンディニスタのゲリラ組織「サンディニスタ民族解放戦線」（FSLN）を生んだのは、正に米政府でした。20年近くニカラグアを占領していた米海兵隊に、アウグスト＝セサル・サンディエーノという將軍率いるニカラグア軍が戦って勝ち、1933年に追い出したのですが、米国は国警隊司令官アナスタシオ・ソモサ（父）と謀って、翌34年、サンディエーノを暗殺しました。ソモサは1937年に大統領となり、42年に及んだソモサ3代独裁体制が始まったのです。

米国は米軍を撤退させた後、ソモサ独裁を残し、これをニカラグア支配の安全弁としたのです。

暗殺されたサンディノ將軍の遺志を継ぐサンディニスタ（サンディノ主義者）は、怨念を晴らす意味も込めて、キューバ革命型の革命戦争を遂行し勝ったのです。

FSLN政権は、パラグアイの首都アスンシオンに亡命していた3代目のタチート・ソモサ元大統領を革命翌年の1980年9月、革命戦争に参加したアルゼンチンゲリラの手を借りて暗殺しました。ゲリラコマンドはバズーカ砲でソモサを乗用車ごと撃滅したのです。

▼中米内戦

グアテマラでは中米で最も長い内戦がありました。アレーバロ政権で国防相を務めたハコボ・アルベンス陸軍大佐は1951年、大統領に就任します。これも人民戦線の流れの一つでしたが、グアテマラ共産党である「グアテマラ労働党」(PGT)と組んで革新政策を実行し、大胆な農地改革を決行しました。

例の米国の国策会社ユナイテッド・フルーツ・カンパニー(UFC)が所有していた広大な農地をはじめ、大土地所有者の土地を容赦なく接収しました。UFCに利権を持っていたのが、当時のジョン・ダレス米國務長官で、実弟のアレン・ダレスCIA長官を動かして軍事クーデターを画策します。

CIAは、軍部内保守派分子らをオンドゥーラスで訓練し1954年6月、グアテマラに侵攻させ、流血の戦闘を経てアルベンス政権を倒しました。大統領はメキシコに亡命し、アレーバロ政権が発足した1945年から続いていた「グアテマラの春」と呼ばれた改革期は終わりました。その後、親米軍事政権が続きます。54年の政変の修羅場に「チェ」と呼ばれる前の青年エルネスト・ゲバラが居合わせたのは有名な話ですね。

アルベンス政権支持派の軍人やPGT黨員らはゲリラとなって武闘を開始します。武闘はキューバ革命後の1960年に本格化し、その後36年も続いたのです。米軍用語で「低強度」の戦闘が断続的に続く間、米軍に支援された軍政による激しい弾圧や虐殺が繰り返された凄惨な内戦でした。最も悲惨な目に遭ったのはマヤ先住民や貧農でした。

内戦被害者の代表としてリゴベルタ・メンチューは、コロンブスが到着し、スペインの米州植民地支配が始まった1492年の500周年に当たる1992年にノーベル平和賞を受賞しましたね。

エル・サルバドルでは、「14家族」と呼ばれた寡頭財閥勢力が米国と連繋して国政を支配していました。20世紀の半ば頃、苦境に耐えられなくなった貧農らが叛乱します。直ちに軍隊が出動し、夥しい数の人々を虐殺しました。このような凄まじい状況から内戦が始まりました。

内戦はニカラグア・サンディニスタ革命が勝利した1979年から92年まで続きました。ファラブンド・マルティ民族解放戦線(FMLN)と親米保守政権の激しい戦闘が続き、痛み分けに終わりました。「サンディニスタ民族解放戦線」(FSLN)は21世紀に入ってから大統領選挙に勝ち、政権に返り咲きました。現在のエル・サルバドルのサルバドル・サンチェス＝セレーン大統領は内戦中、FSLNゲリラ最高幹部の一人でした。

オンドゥーラスは米国の言いなりになる国です。グアテマラ、エル・サルバドル、ニカラグアと国境を接し、中米内戦中は米軍の作戦支援基地になりました。一連の内戦は東西冷戦期でしたから、ソ連やキューバがゲリラ側を支援したのは言うまでもありません。

▼エスキブラ合意

さて、コスタ・リカ（CR）にオスカル・アリアスというノーベル平和賞を受賞した大統領がいましたね。アリアスは1986年に大統領に就任し、すぐに和平活動に入ります。遡ること3年、1983年にレーガン米政権はカリブ海のグレナダを軍事侵攻し、キューバ寄り政権ができるのを阻止しました。侵攻軍は小規模なキューバ駐留部隊と短時間戦闘し、これを制圧しました。この敗北はフィデル・カストロには屈辱でした。レーガン政権はまた、内戦の中米で反革命側への軍事支援を強化していました。

こうした米国の軍事介入に危機感を募らせたラ米諸国に、「域内の紛争は域内で解決しよう」という決意が生まれました。パナマ、メキシコ、コロンビア、ベネズエラの外相は1983年、パナマ運河の太平洋側出口の沖にあるコンタドーラ島に集まり、中米和平について話し合いました。ここに「コンタドーラ・グループ」という4ヶ国の和平推進組織が発足しました。

次いで、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、ペルーの南米4ヶ国が「コンタドーラ支援グループ」を結成します。両グループはリオデジャネイロで会合し、「リオグループ」（GRIO）にまとまります。そのような状況下でアリアスが大統領になったわけです。

アリアスは、中米内戦域に隣接するCRの大統領として、8ヶ国の和平工作に乗ったのです。このことが重要です。小さなCRだけで和平達成が叶うわけがありません。しかしCRにはCRなりの努力がありました。

アリアスの前のルイス・モンヘ大統領は「コンタドーラ・グループ」に接近し、1983年11月、「永世中立国」を宣言します。レーガン政権から、ニカラグアを攻めるための軍事基地をCR西部の国境地帯に置かせてくれと求められると、断りました。しかし米国はそんな宣言を認めないわけです。事実、ニカラグアの「サンディニスタ民族解放戦線」（FSLN）主流派に反旗を翻したエデン・パストーラ（コマンダンテ・セロ）の一派はCR西部からニカラグアに攻め込んでいました。因みにパストーラは今ではオルテガ政権に協力しています。

アリアス大統領もレーガン政権から相当の圧力をかけられながら米側への加担を拒否しました。しかしCRだけでは弱いので、欧州諸国を歴訪し、中米和平への支持を確保しました。コンタドーラ・グループ、同支援グループ、モンヘ前大統領の中立外交などの平和路線に乗ったアリアスは「中米紛争は中米の主導で解決を」と志しました。

まずグアテマラのエスキブラで、グアテマラ、エル・サルバドル、オンドゥーラス、CRの4ヶ国首脳会議を開き、和平への合意をつくり、その上でニカラグアのダニエル・オルテガ大統領を招き入れ、さらなる合意形成に尽力しました。その結果、他国の軍隊介入と軍事援助の撤廃、基本的人権の回復など、和平条件を策定することができました。

アリアスは1987年8月、グアテマラ市で「エスキブラ合意」調印に漕ぎ着けました。記者会見に詰めかけた何百人もの国際記者団は、不可能と思われていたことが可能になって驚愕しました。まさに奇跡的だと受け止められたのです。

最終合意に近づいていた1986年10月、アイスランドの首都レイキャヴィックでレーガン大統領とソ連のミハイル・ゴルバチョフ書記長の首脳会談がありました。書記長は全ての弾道ミサイルの廃止を主張し、レーガンは宇宙軍事化を狙う「戦略防衛計画」（SDI）の例外扱いを主張して

譲らず、軍縮合意は成り立ちませんでした。しかし、この会談は1989年12月のマルタ会談に繋がります。

地中海のマルタでゴルバチョフとジョージ・ブッシュ米大統領（父）は会談し、東西冷戦終結を宣言しました。このような両大国の決意は、冷戦の名残だった中米内戦の当事諸国への援助が途切れることを意味していました。こうした時代背景が中米和平を不可避にしていたのです。アリアスは功績を讃えられ、1987年にノーベル賞を与えられました。

アリアスの思想の中に、1948年の国軍廃止以来の「非戦・平和主義」が波打っていたのは疑いありません。

▼トリホス将軍の死

コンタドーラ・グループの一員として活躍したパナマについて少し話します。パナマはコロンビア領でしたが、中米地峡にあって独立志向が長らく潜在していました。スエズ運河開通に刺激された米国はパナマ運河建設を決意し、1903年、独立運動を支援する形でコロンビアに軍事圧力をかけ、その年11月、パナマを独立させました。

全長約80キロの閘門式パナマ運河は第1次世界大戦開戦の翌月、1914年8月15日に開通しました。米国は不平等な運河条約に基づき、運河の両側8キロずつの帯状の土地に多くの米軍基地を起し、運河運営を管理していました。パナマ通貨は米ドルです。パナマは当時のキューバ同様、米国の属領状態にありました。

エジプトのナセル政権は1956年、英仏両国からスエズ運河を奪回しました。「スエズ動乱」と呼ばれた武力紛争を経てのことです。エジプトの快挙に民族主義を煽られたパナマでは運河奪回を求める声が徐々に高まります。1964年1月、運河地帯にパナマ国旗を掲揚しようとしたパナマ人大学生ら22人が米軍に射殺される事件が起きました。運河奪回世論は一気に高まります。

これを受けたパナマ国家警備隊の大佐集団が1968年10月、クーデターで政権を掌握しました。大佐たちの中で抜きん出ているオマール・トリホスが将軍に昇進し、大統領でなく「パナマ革命の最高指導者」に就任し、運河奪回実現を至上命令として軍政を指揮します。メキシコに駐在していた私たち外国メディア記者団はトリホスから2度パナマに招待され、運河奪回戦略やパナマ情勢取材しました。コロン自由貿易地域のあるカリブ海側から、パナマ市のある太平洋側まで船で運河を通航し、貴重な経験もしました。

トリホスはカーター米大統領と1977年、新運河条約を締結し、1999年12月31日正午の運河返還を勝ち取ります。しかし将軍はその日を迎えることなく、1981年7月31日、搭乗していた軍のヘリコプターが空中爆発し、暗殺されてしまいます。トリホスは国内視察に出掛ける日は早朝、出発するヘリポートを何度も変更していました。暗殺を警戒していたのです。

私は勤務していた通信社の東京本社外信部の職場にいたとき、トリホス死去の至急報を受けたのですが、取材で何度も行動を共にした将軍の佇まいを思い浮かべました。

▼パナマとハイチ

その後しばらく経ってから、国家警備隊のマヌエル・ノリエガ大佐がパナマの最高指導者になり、将軍に昇進します。ノリエガはCIAの協力者でした。米国にとっては「知りすぎた男」でした。CIA長官経験者であるブッシュ大統領（父）はマルタで冷戦終結宣言をした直後の1989年12

月、大軍をパナマに送り込み、パナマ軍兵士や貧しい市民らを大量に殺しました。この侵攻でノリエガ政権を押し潰し、90年初めノリエガの身柄を「麻薬不法取引」罪でマイアミに強制連行し、裁判で20年の長期刑を科しました。ノリエガは刑期を終えた後もフランスとパナマで服役し、服役囚のまま2017年に死去しました。

ブッシュのパナマ侵略にはいろいろな目的があったはずですが、パナマ運河返還後も運河地帯を軍事支配する狙いがありました。ノリエガは国警隊を国軍に昇格させ編成していましたが、米国はこれを潰して国警隊に戻しました。興味深い情報はあります。ブッシュは息子ブッシュ（後の米大統領）がパナマで放蕩生活を送っていた時期の証拠写真などを発見し焼却する密かな目的を持っていたということです。息子が将来、大統領選挙に出馬する際に致命的な証拠となる秘密資料をノリエガ当局から奪い、焼却せねばならなかったということです。

息子ブッシュは後年、「麻薬などにのめり込んでいた自分は神に救われた」と述懐しましたが、「パナマの秘密資料」説と幾分符合するような発言でした。

パナマも一応、「軍隊のない国」ではあります。カリブ海のハイチ（アイティ）では、デュヴァリエ父子の長期独裁を経て「民主化」期に入り、ジャンベルトラン・アリスティド大統領は1996年に国軍を廃止しました。アリスティドは21世紀初め再び政権に就きますが、民族主義的改革政策を利権を持つ諸外国から嫌われます。

ブッシュ息子米政権の主導に仏加両国が協力して、アリスティドは米軍用機でアフリカに強制連行され放置されてしまいます。「身柄連れ去り・置き去り」という新しいクーデターの形ができた瞬間でした。フランスはハイチの旧宗主国、米国はフランスに代わる事実上の宗主国、カナダのフランス語圏の中心ケベック州はハイチに影響力を持っています。

現在のジョヴネル・モイーズ大統領は2018年、国軍を22年ぶりに復活させました。これにより、ハイチは「軍隊のない国」ではなくなりました。

▼サモラの勝訴

話はコスタ・リカ（CR）に戻ります。1949年憲法は国軍を正式に廃止しましたが、別の条項には、もしCRが攻め込まれたら、成り立ちうる米州の総意に基づき、かつCR自衛の必要があれば、大統領は軍隊を再編成することができる、と明記されています。米州諸国機構（OEA）と米州相互援助条約（TIAR）がありますが、国防が極めて困難な状況に陥りそうになったら国軍を再編できるという、非武装でなくなる場合を想定した条項が用意されているわけです。

この点では、CR平和憲法より2年早い1947年発効した日本国憲法は9条で、軍備と戦争の放棄を謳っています。ところが朝鮮戦争が始まった1950年、米政府と米軍の意志で「警察予備隊」が編成され、52年の「保安隊」への再編を経て、54年に陸上自衛隊になりました。その後、海と空の自衛隊ができました。日本は今や、世界の非核保有国の中で最も強い軍隊を持っている国の一つです。

日本国憲法は改憲抜きで自衛隊が存在してきたため、自衛隊合憲化の見地からは現実にそぐわなくなってます。しかし逆に観れば、開戦と敗戦の反省に立つ日本人の多数派が改憲を許さなかったほど大切な9条の平和条項が燦然と輝いてきた、と言うことができるでしょう。9条の平和主義はCR憲法よりも徹底しています。ですが、徹底していないのは日本人有権者の憲法を守

り活かすための積極的意志と行動ですね。

CRには、モンヘ大統領の永世中立宣言や、アリアス大統領の中米和平外交がありました。しかし試練もありました。21世紀初頭、イラクに攻め込んでいたブッシュ息子政権は、CR政府に国家警備隊の小部隊をイラクに派遣するよう求めました。CRはそれを派遣しました。しかしCR憲法は、戦争放棄を謳ってはいませんが、理念として戦争しないという「非戦の論理」を含んでいるのですね。

なのに大統領はその論理に反して、米国の圧力で小規模ながら国家警備隊を派遣してしまった。そう訴えたCR大学法学部の学生がいました。きょうの映画に何度も出ていた若い憲法学者のロベルト・サモラです。一大学生が大統領を相手取り憲法裁判を起こしたのです。そして勝訴し、大統領は派遣した部隊を引き揚げ、帰国させました。サモラは「平和憲法は守るべきものではなく使うものだ」と強調します。CR人の平和を築く意志が凝縮された発言ですね。

サモラは日本に招かれ講演旅行をした後、国際NGOピースボートの国際部に入り、世界周遊航海に何度か乗りました。その後、弁護士になり、一時、駐韓大使を務め、今は憲法解釈の専門家とされています。私はピースボートの船上講師をしています、サモラとは友人です。

▼オトン・ソリース

オスカル・アリアスが再選された2006年大統領選挙の対立候補は、オトン・ソリースという候補でした。オトンはアリアスが所属する保守的な「国民解放党」(PLN)と袂を分かち、「市民行動党」(PAC)を結党して出馬しました。サモラはオトンの改革政策の参謀でした。

私は、オトンとピースボートにニューヨークからコスタ・リカ(CR)太平洋岸のプンタレナス港まで同船し、連日、インタビューを兼ねて話し合いました。オトンはCR政治状況を語る臨時の船上講師として乗船していたのです。私はサンホセでもオトンの選挙運動取材し、サモラに再会しました。

オトンはニューヨーク出航後の最初のインタビューで開口一番、「私が当選したら、真っ先に日本を訪れる」と言ったのです。軍隊を廃止した憲法を持つCRと、平和憲法を持つ日本の首脳が会談し、世界に向けて平和、政治、憲法はこうあるべきだと訴え呼び掛けけるというのです。そして私に「訪日時最初のインタビューはあなたが相手です」と約束してくれました。私はそれを楽しみにしていたのですが、オトンは僅差で敗れました。

私はオトンの背後にサモラを見ていました。平和憲法についての意思表示は、明らかにサモラから学んだ結果でしょう。オトンは、たとえ自衛隊の軍備が巨大で、日本国憲法の平和条項と相容れないにせよ、日本人は立憲主義の立場から憲法を活かすよう闘うべきだと言いました。確かに、サモラの勝訴に象徴されるCRの立憲主義には学ぶところが多いと思いました。

▼中米運命共同体

コスタ・リカ(CR)の平和憲法についてのお話は、これで終わります。今日の映画は、最後の自然環境保護の部分が削除されていました。アマゾンで何年も前から続いている凄まじい熱帯雨林破壊を見ますと、自然保護の努力は焼け石に水のように感じられ、悲観的になります。しかしCRのような国土の狭い国で、かなりの部分が自然保護区になっているという事実は重要であり、励まされますね。

19世紀の半ば過ぎでしたか、米国のクエーカー教徒の集団が非戦主義の立場から徴兵制に反対してCRに移住し、広大な土地を買い取って住み始めました。その土地のなかで自然が残っていた土地が今、環境保護地域になっています。商業主義が万能で金儲け主義が優先されるような社会では土地の保護は難しいため、平和を築き強化する場合のように、その国の市民の確かな決意が必要です。

話を転じると、CRにはかつて白人優先主義があり、白人にあらざれば1級市民ではないというような状況がありました。「中米のスイス、CR」という形容は、「南米のスイス、ウルグアイ」と並べられて50年ぐらい前まで盛んに口にされていました。その根底には、「平和で発展した白人国」という認識がありました。

しかしCRには黒人や混血の市民が少なからずいますね。ウルグアイも同じです。中米の最貧国で隣国のニカラグアからはたくさんのお稼ぎ労働者が越境してきて住みついています。CR国籍を取得する者もかなりいます。ニカラグア人の多くは混血です。

社会問題もあります。中米はコロンビアなど南米アンデス諸国で生産されるコカインの密輸路になり、麻薬犯罪が目立っています。米国が「中米北部三角形」と呼ぶグアテマラ、エル・サルバドル、オンドゥーラスと比べCRは、麻薬・武器密輸、マフィア・暴力団抗争などの組織犯罪は少ないのですが、年々深刻化しています。

経済面では、アリアス第2期政権が「米国・中米・ドミニカ共和国自由貿易協定」(CAFTA-RD)に加盟したことから新自由主義が一層拡がり、貧富格差が激しくなり、環境破壊も増える傾向にあります。

ですからCRは決して「100%素晴らしい国」ではありません。すべての国々と同じように、良いところもあれば悪いところもある国です。

中米には独立直後には中米連邦があり、今は「中米統合機構」(SICA)やCAFTA-RDがあり、中米諸国は協力し合って生きています。南北両米大陸を結ぶ地峡にあって、東側がカリブ海に面した中米は、北・南・東の3方と交流し、互いに影響し合って生きています。

そんな中米を鳥瞰し、中央部のニカラグアと東端のパナマの間をズームアップすれば、CRが浮かび上がってきます。CRは中米の中に深く根を下ろしています。日本がアジアを離れては生きられないように、CRも中米を離れては生きられません。

ご静聴、ありがとうございました。

(いだか ひろあき 本研究所学外所員、ジャーナリスト)